

報道機関 各位

熊本大学

## 【記者発表のご案内】

幕末期熊本藩の領外欠落者の実像を明らかに  
——行き先は、力士・物取り・新選組など——

（ポイント）

- 幕末期の細川家文書「口書」<sup>くちがき</sup>の分析から、藩領外で欠落・出奔<sup>かけおち</sup>した当該期の熊本藩領民の実像を明らかにしました。
- 幕末期、熊本藩は京都の警衛を命じられたことから、武士の従者として多くの武家奉公人（足軽・中間<sup>ちゅうげん</sup>・小者）が上京し、その結果、京都での欠落者が増加しました。
- 欠落者の多くは、日雇い労働者となって生計を立てましたが、力士になる者や、商家で脅して金品を奪う押借りなどを行い、治安を悪化させる者もいました。
- 特徴的な事例として、武士への取り立てを勧誘されて江戸まで出奔した百姓や、大坂で欠落し、新選組に入隊した郷士（在御家人）がいました。

### 〔記者発表について〕

本研究成果について、詳細を説明する機会を下記のとおり設けます。参加をご希望の場合は、準備の都合上、別紙「連絡票」により、3月26日（木）17：00までに、熊本大学総務部総務課広報戦略室までご連絡願います。

・日時：令和8年3月30日（月）10：00～11：00（予定）

・場所：熊本大学工学部1号館2階共用会議室A

（熊本市中央区黒髪2-39-1）

※対面・オンラインのハイブリット形式で実施いたします。オンラインでの参加を希望される方には3月27日（金）17：00までに、連絡票記載のメールアドレスに、参加URLを共有させていただきます。

## （概要説明）

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授らは、2023年度から科学研究費補助金の交付を受け、細川家文書「口書」の総合的研究に取り組んできました。

「口書」とは、熊本藩の刑事法制担当部局（刑法方）が作成した史料群です。庶民を主な対象として、藩領内外で発生した犯罪・事件などの被疑者の供述調書が収録されています。供述調書には、犯罪や事件に至る経緯のほか、被疑者の心情や周囲の関係も記されており、情報量は極めて豊富です。

今村准教授らが、幕末期（文久3年〔1863〕～慶応3年〔1867〕）の細川家文書「口書」（全10冊）を分析したところ、以下の新事実等が明らかになりました。

- ① 欠落・出奔（以下、「欠落」）とは、無届での逃亡・失踪・移住を意味します。  
熊本藩でも、江戸時代を通じて欠落は多くみられました。しかし幕末期になると、京都における武家奉公人などの欠落の事例が急増します。その理由は、朝廷から京都警衛を命じられた熊本藩が、文久2年から多くの武士を京都派遣したことにともない、その従者として多くの武家奉公人も上京したためでした。
- ② 供述調書によると、藩領外での欠落の主な理由は、主に藩邸の門限などへの遅刻や、問題を起こして郷里の家族や親族に合わせる顔がない、というものです。欠落後、彼らの多くは、日雇稼ぎに従事しますが、相撲取りに弟子入りする者もいました。また、京都での人斬りの横行がもたらす町人の恐怖心に付け入り、押借りを行った足軽も確認できます。
- ③ 幕末期の時代相を象徴する事例として、武士になることを目指し、江戸まで出奔した百姓や、大坂で欠落した後、新選組に入隊した郷士があげられます。前者の欠落理由は、水戸徳川家から武士に取り立てられると、知人に勧誘されたためですが、実際は強盗集団の仲間集めのための勧誘でした。後者は、江戸に留学し、福澤諭吉の英学塾で学んでいた郷士が、遊郭でトラブルを起こして捕らえられ、国許に移送される途中の大坂で欠落し、食べていくために新選組へ入隊したものです。

## （説明）

### 〔本研究の背景①—細川家文書「口書」について〕

本研究で分析した「口書」は、熊本藩の刑事法制担当部局である刑法方による記録帳簿群です（史料1）。18世紀前半の正徳2年（1712）から幕末期の慶応3年（1867）まで、全134冊が現存しています。「口書」には、1冊あたりの総丁数が2,000丁を超え、収録事件の数が150件以上におよぶものもあります。収録されている供述調書は基本的に庶民層であり、熊本藩の下級武士や武家奉公人なども含まれています。

彼らの供述調書には、事件や犯罪に至る詳細な経緯のほか、被疑者の心情、周囲の人間関係などが記され、情報量は極めて豊富です（但し、「口書」に収録された

事件は、あくまで被疑者が捕縛・自首の上で処罰対象となったものに限られ、実際に起こった事件・犯罪の氷山の一角である点に注意する必要があります。)。本来、記録を残しにくい階層の人びとの証言録であり、庶民史料として非常に貴重な存在です。

しかし、分量が膨大な事情もあり、これまで「口書」を対象とするまとまった研究は行われていませんでした。そこで、永青文庫研究センターの今村准教授らは、2023年度から科学研究費補助金の交付を受け、学外の研究者とともに、「口書」の総合的研究に着手しました。最も重要な基礎作業は、「口書」に収録された事件ごとに、件名目録を作成する作業になります。

### [本研究の背景②—熊本藩領民の欠落について]

欠落とは、現住地などから、無届のまま逃亡・失踪・移住する行為をさします。近世後期熊本藩の場合、庶民による欠落が生じると、その家族や村役人などが一定期間捜索を行い、見つからない場合、欠落した旨の届出が藩に出されました。

欠落が起こったのは、どのような場所だったのでしょうか。幕末期（文久3年〔1863〕～慶応3年〔1867〕）の「口書」（全10冊）を分析したところ、欠落を理由に罰せられた事件（全60件）のうち、最も多かったのが領内（国許）でした（35件）。庶民たちの多くは、自らが居住する村や町から欠落していたのです。これは、江戸時代を通じた一般的傾向であったとみられます。

もちろん、領外での欠落も一定数存在しました。江戸時代を通じて多かったのは、江戸での欠落です。その主な中身は、参勤交代で江戸に上った武士の従者として同行した武家奉公人が、当地で欠落したものになります。幕末期にも、江戸での欠落が9件確認できます。

しかし、幕末期、領外で最も多くの欠落が起こっていたのは、江戸ではなく京都でした（10件）。これには、幕末期特有の政治状況が関係しています。

### [本研究の内容①—幕末期における京都での欠落増加とその背景]

京都での欠落は、元治元年（1864）に1件、慶応元年（1865）に5件、慶応2年に2件、慶応3年に2件と推移します。主に元治年間以降に増加する背景には、熊本藩による京都警衛という事情がありました。

文久2年（1862）以降、朝廷の命令を受けた熊本藩は、いくつかの外様諸藩と同じく、京都を警衛するために多くの武士を派遣します。それにともない、彼らの従者である武家奉公人も上京しました。京都での欠落の多くは、上京した武家奉公人で占められています。

彼らの供述調書によると、その主な欠落理由は、藩邸の門限などへの遅刻や、問題を起こして郷里の家族や親族に合わせる顔がない、というものでした。外出先で

泥酔して門限を逃した事例や、京都での生活で散財して借金を重ね、家族などへの面目を失ったとする事例が多く確認できます。なかには、京都で恋仲となった女性から引き止められたために帰国の出発刻限に遅れ、そのまま欠落に至ったとする足軽や、元治元年7月の禁門の変による大火で財産を失い、借金返済の目途も立たないために欠落したという下級武士もいました。

### [本研究の内容②—その後、欠落者はどこへ？]

供述調書を読み解くと、欠落者がその後、どのように生計を立てていたのかについて窺い知ることができます。

領内外を問わず、多くの欠落者が従事したのが日雇稼ぎでした。とくに幕末期の京都では、多くの幕藩領主が長期滞在したことで、労働力需要が膨張し、稼ぎの機会が増えていたとみられ、実際に欠落者の何人かは日雇稼ぎを行っています。

京都での欠落者には、力士となる者もいました。武家奉公人として上京した玉名郡立花村（現玉名市）出身の藤次郎は、慶応元年（1865）4月に藩邸の門限を逃して欠落した後、松浦潟という相撲取りに弟子入りし、丹波国の亀山（現京都府亀岡市）で、一か月ほど稽古に励んだと供述しています（史料2）。

さらに、京都の治安を悪化させた欠落者も確認できます。欠落した足軽の山口角蔵なる人物は、元治元年（1864）1月頃、同じく上京した仲間とともに、京都の米屋で押借りをを行っています。彼は、当時横行していた長州の浪士や諸藩の過激派による人斬りや強盗のため、町人が「帯刀之者」を恐れていることに乗じ、米屋の店主を恫喝して金銭を奪っています。また、盗みを繰り返した欠落者もいました。

このように幕末京都では、上京した武家奉公人の一部が欠落し、当地で日雇稼ぎや力士となるほか、押借りや盗みを行い、治安を悪化させる事態がみられました。

### [本研究の内容③—幕末の時代相を象徴する欠落二例]

幕末期の「口書」には、当時の時代相を象徴するような欠落もみられます。特徴的な二つの事例を紹介します。

第一に、武士になることを目指し、国許から江戸まで出奔した百姓の事例です。文久元年（1862）9月、玉名郡二俣村（現玉名郡玉東町）の百姓であった権之助は、以前に同村から江戸に出奔していた次郎助なる人物の誘いを受け、出奔します。次郎助の誘いは、江戸で「水戸様」（水戸徳川家）の挙兵計画があり、浪人を募集しているから一緒に来ないか、計画成就の際には知行取に取り立てられる、というものでした。もともと農業が嫌いで「武士好き」であった権之助は、この勧誘に応じ、次郎助とともに江戸へ向かいます。しかし、江戸に着くと、次郎助から商家への強盗に加わるように言われます。つまり、水戸徳川家への取り立て話は虚偽であり、実際には強盗集団の仲間集めだったのでした。強盗への参加を渋った権之助は、次

郎助から命を狙われることとなったため、翌文久2年正月、南町奉行所に次郎助の企てを訴えました。その後、権之助も欠落の罪状で熊本藩役人に捕らえられ、江戸から熊本へ移送されています。

第二に、江戸で問題を起こし、移送途中の大坂で欠落して、そのまま新選組に入隊した郷士（在御家人）の事例です。文久3年5月、山鹿郡新町（現山鹿市）の在御家人（郡代直触）であった保理井大助は、熊本藩から英学修行を命じられ、江戸に派遣されます。大助は同年7月、中津藩士の福澤諭吉が築地鉄炮洲（現東京都中央区明石町）の同藩中屋敷で開いていた塾に入り、英学修行を始めます。大助の名は、当時の福澤塾の塾生名簿「性名録」にも記されており、熊本からの慶應義塾入塾者第一号と評価されています。

しかし、大助は翌文久4年2月、新吉原の遊郭で深酒してトラブルを起こし、捕らえられてしまいます。熊本藩に引き渡された大助は、国許に移送されることとなりますが、彼は親類たちに面目が立たないと思い、慶応元年（1865）正月、船で移送途中の大坂で、同船していた吉武廣太なる人物とともに欠落します。二人は、そのまま京都へ向かいますが、当面の生活に事欠いたため、新選組に入隊したといえます。大助らは、食べていくために新選組に入ったのです。二人はしばらく新選組で過ごしますが、英学修行への願望が募った大助は、慶応2年6月に京都を離れ、横浜に向かいました。しかし、物価高騰もあって横浜での生活が困難となり、同年12月、大助は熊本藩の江戸上屋敷へ自首するに至ります。

慶応元年7月頃に作成された新選組の隊士名簿「新選組英名録」に、大助と廣太の名前はありませぬ。そのため、大助の供述調書に基づく上記の内容は、彼の偽証という可能性も考えられます。しかし、大助の福澤塾への入塾が事実であることを鑑みれば、新選組入隊に関しても信ぴょう性が高いと言わざるをえませぬ。彼らが入隊していたのであれば、新選組には、多様な理由による諸国からの欠落者が含まれていたこととなります。近年の研究で、新選組は政治集団であると評価されていますが、その構成員は「国事」に関心をもつ者ばかりではなかつたのです。

なお、保理井大助の供述調書は、熊本大学大学院人文社会科学研究所（文学系）の三澤純氏が発見し、その教示を受けた熊本県立美術館の宮川聖子氏が、同編『土方歳三資料館×肥後熊本藩』土方歳三資料館展実行委員会、2024年）で全文を紹介しています。本研究は、こうした成果をもとに、「口書」に収録された他の欠落者の事例もふまえながら、大助の事例の意義について検討を加えたものです。

## [今後の展開]

幕末期を対象とする研究で、最も大きな蓄積を誇るのは政治史研究といえますが、近年の研究は政局分析に特化しがちとなっており、政局の周辺にある社会・経済などの諸要素が捨象されている、との批判がなされています。

本研究は政治史研究ではありませんが、幕末期の欠落者の実像を明らかにすることで、当該期の政治変動（京都警衛、浪士問題、新選組など）と彼らの動向が深く結びついていた点を明らかにしました。幕末期の政治変動は、積極的に「国事」に関わろうとした人びと（とくに武士）だけでなく、それとは異なる庶民の生のあり方にも大きな影響をおよぼしていたのです。

「口書」には、欠落以外にも多くの事件・犯罪に関する供述調書が収録されています。今後は分析対象の時期を広げつつ、支配領域や身分集団を越境（移動）することとなった近世後期の庶民の実像について、解明を進めていく予定です。

なお、本研究の詳しい内容は、今村直樹「欠落・出奔の幕末社会—細川家文書『口書』を素材に—」として、2026年3月末に刊行される『人文科学論叢』第7号（熊本大学大学院人文社会科学部〔文学系〕発行）に掲載予定です。

#### 〔用語解説〕

※欠落...江戸時代、貧困、悪事などの事情で逃亡し、行方をくらますこと。

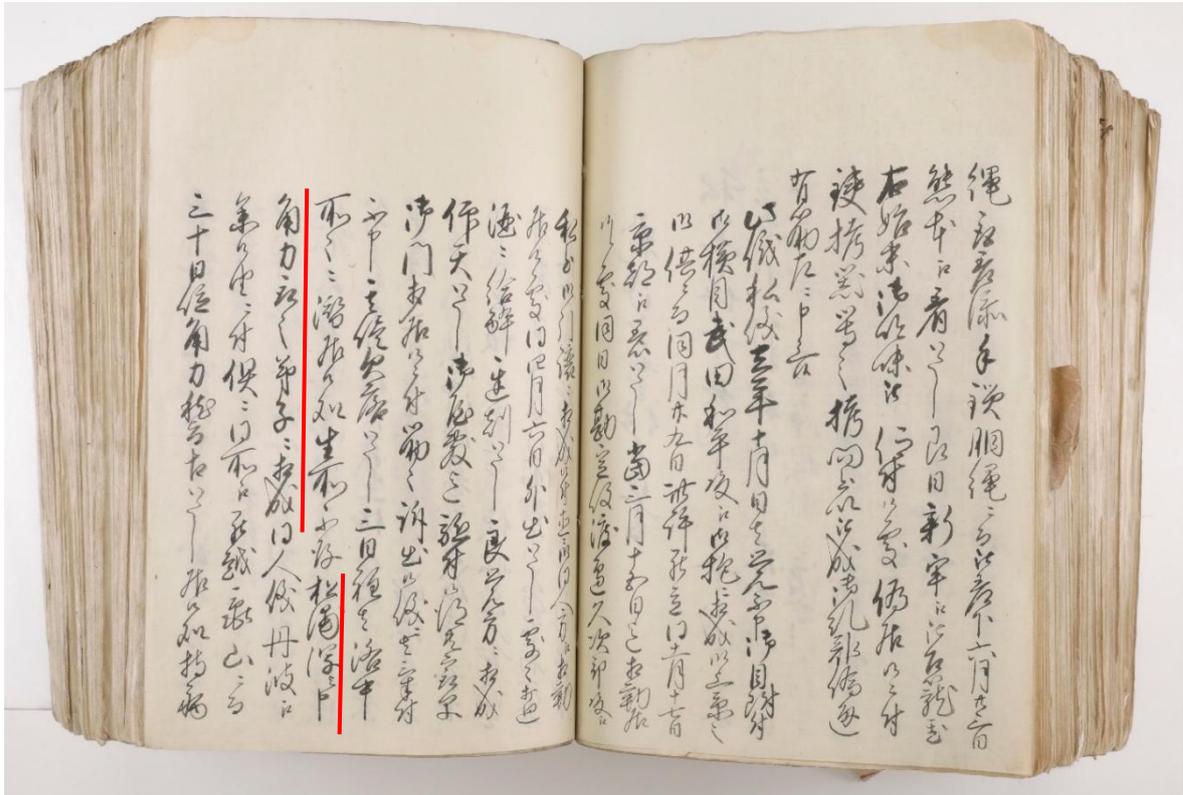
※武家奉公人...江戸時代、武士の従者であった若党・足軽・中間・小者などの総称。

このうち戦闘要員は若党・足軽で、ほかは武器・物資の運搬などに、また平時には家政上の雑役に従事した。

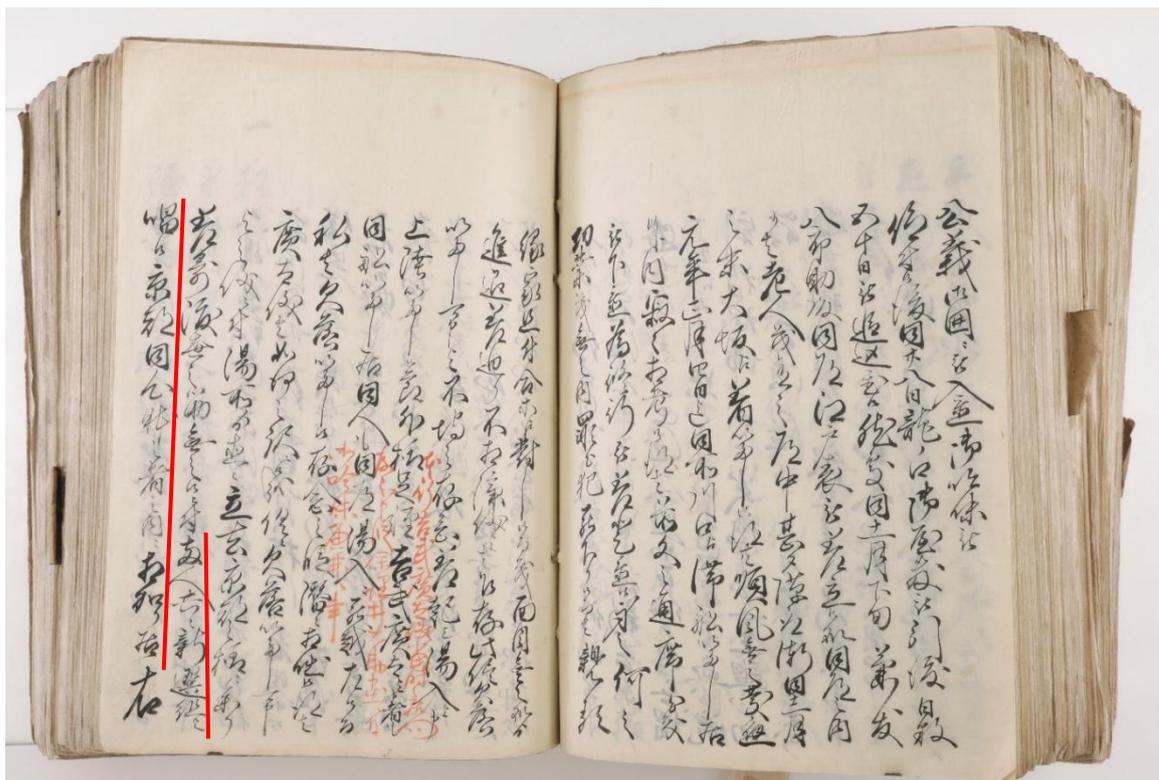
#### 史料1 「慶応三年 口書」（目録番号14.7.4）の表紙



史料2 相撲（角力）取に弟子入りした欠落者（藤次郎）（「慶応二年 口書」目録番号14.7.2）※傍線部に、「松浦瀧与申角力取之弟子ニ相成」とあり



史料3 新選組に入隊した欠落者（保理井大助）（「慶応三年 口書」目録番号14.7.4）※傍線部に、「兩人共ニ新選組与唱候京都同心躰之者之内ニ相加里居」とあり



解禁日時：令和8年3月30日（月） 11時

**【お問い合わせ先】**

（研究に関してのお問い合わせ）

熊本大学永青文庫研究センター

担当：准教授 今村 直樹

電話：096-342-2304

e-mail：ikoan@kumamoto-u.ac.jp

（報道に関するお問い合わせ）

熊本大学総務部総務課広報戦略室

電話：096-342-3271

e-mail：sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

解禁日時：令和8年3月30日（月）11時

## 【連絡票】

幕末期熊本藩の領外欠落者の実像を明らかに  
——行き先は、力士・物取り・新選組など——

・日時：令和8年3月30日（月）10時00分～11時00分（予定）

・場所：熊本大学工学部1号館2階共用会議室A

（熊本市中央区黒髪2-39-1）

貴社名	
ご出席予定	<ul style="list-style-type: none"><li>・ご芳名：</li><li>・E-mail：</li><li>・出席人数（                  名出席）</li><li>・参加形式（対面・オンライン）</li></ul>

※恐れ入りますが準備の都合上、3月26日（木）17時までに、メール又はFAXにて送信くださいますようお願いいたします。

※対面・オンラインのハイブリット形式で実施いたします。オンラインでの参加を希望される方には 3月27日（金）17時までに、連絡票記載のメールアドレスに、参加URLを共有させていただきます。

熊本大学総務部総務課広報戦略室宛

メール送付先：sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

FAX送付先：096-342-3110